

二葉亭における現実認識の構造（上）

——いわゆる「実感」の論理について——

寺 横 武 夫

「実感」——このことばは、それにいかなる語感がともなっているかは個々人によって異なるにせよ、いたって耳なれた身近かなことばのひとつであることに相違あるまい。しかし、このことばが意味するものを、一歩つきすすんで概念的に整理しようとする、意外にいたって断片的な表象しかうかばないか、ないしはほとんど「実際の感じ」といったふうの、漠然とした概念内容が想起されるか、にとどまることが多い。

例えば、*real feeling, actual experience, lifelike* などと訳してみたとして、語感はまったく変る。おそらくは、日本の風土ではぐくまれたことばであって、問題は、かなり複雑であるにちがいない。われわれの関心がことは自体の問題にとどまるのではないことは言うまでもないが、ことば自体を考えてみても、「実感」はもともと「実」と「感」という、本来は別々の発想法がひとつに融合して成りたった熟語ではなかったか。そして、この熟語の成立過程で、「実」のなかに「実際」「現実」というニュワンスをこめるか、「真実」に近似した概念性をとり入れるかという、前提上の振幅を潜在させながら、すぐれて個性的なことばと

して自立してきたのではなかったらうか。

思考する作用を、概念として定着された思想と、その前段階をなす発想法とに弁別するとき、同じ思想でも、なにが彼をそこに導いたかは人それぞれによって違っており、その経路の違いによって発想法は異なり、思想が人間を動かすその機能もまた異なるであろう。そして、そのばあい、発想法とは、このような人それぞれ性格と内的欲求の相違によって、無意識の世界から観念としての思想が生れ出るとき、思想衝動のタイプを意味している。無意識の世界には思想以前の欲求や衝動のうずまきがあり、意識の表面には、合理性によって世界をとらえてゆく人間の、明確に概念化された思想がある。その途中に位置した、発酵しつつある思想としての発想法には、その人その人の生きかたや感情の型が深く刻印されている。

ことばがひとつの思想をになうものであるとき、また同じ事情がそこに介在していることを認めねばなるまい。

ことばは、ことばとして一旦成立してしまっただけには独自の跳梁を見せて、その語の成立過程でにあっていたニュワンスがと

もすれば稀薄にったり、忘れ去られてゆき、そのできあがりの語が日常生活にどのよう^に使用されているかという、いわばことばの実体としての機能的側面だけが強く前面に抬頭してくるといふ状況を示す。「実感」について論ずるばあい、ことばの機能的分析にとどまることなく、いわばその原始にまでたちもどることの必要性を確認しておきたいと思う。

ところで二葉亭において、いわゆる「実感」の主張が明治四十一年になって頻出するという事実は瞠目に価する。

「例えば此間盜賊に白刃を持って追掛けられて怖かつたと言ふ時にや、其人は眞実に怖くはないのだ。怖いのは眞実に追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時にや既に怖さは余程失せてゐる。こりや誰でもさうなきやならんやうに思ふ。私も同じ事で、直接の実感でなけりや眞剣になるわけには行かん。ところが小説を書いたり何かする時にや、この直接の実感といふ奴が起つて来ない。」（「私は懷疑派だ」明41・2）

右のような主張のおこなわれる明治四十一年は、その年の六月朝日のロシア特派員としてペテルスブルグにおもむき、翌四十二年五月には肺結核のため急遽帰国する船上で劇的な死を迎える、その死の前年に当る。それはまた、「浮雲」「其面影」「平凡」という、たかだか三編しか残さなかつた彼の小説のすべてを書き終えてしまつたあとをも意味している。つまり、おのれの文学上の営為に關しては、こうした結論的な「実感」論をもつたままですえさつた、というのが客観的な事実なのである。彼の「実感」論は、いわばみずから刻んだ墓碑銘なのだ。

以下で検討しようとするのは、このような「実感」論の特質を

まずその機能の側面においてとい、次いで、その論理を獲得するにいたる彼の精神の歴史的展開の局面をながめ、更に、自然主義を中心とする同時代の認識法との対比をこころみて、以上であらわになつてくる思想的な諸矛盾を概略しようとするのである。

二

語られた「実感」は信用しがたい、最終的にはすべて「直接の実感」によつて納得されるところがなければ価値はない、と二葉亭が述べるその「実感」の概念内容とは、いかなるものであるか。先にもふれたように、「実感」は、きわめて多義的なことばであり、社会的な文脈でも異なつた振幅をもち、二葉亭個人の文脈においてもそれぞれの体感がしみついているため、安易な分析を許さぬ神聖さをもっている。厳密な概念規定は至難なこととしても、しかし、不可触の地位に安置させてもおけない。

二葉亭が用いている「実感」の用例から、われわれはさしずめ以下に述べるような三点において彼の「実感」論の機能を整備してみることが出来る。その第一は、「実感」の成立する機構についてであり、第二は、「実感」のもつ屬性に關する問題であり、そして、第三に、「実感」論の志向方向についてである。

「実感」論の主張が四十一年になって頻出するのは先にふれたが、最初の用例が見えるのは、管見によれば、三十年五月のそれである。

「小説を以て一生涯身を委ねる事業とするにはすね、之れに身命をも捧げてしまつて、一生懸命に骨を折る事業として見れば

ですね、唯道楽では、自分には心に安んじない所が出来てきます。それで道楽以上に何ものかあるだろうと思ふのです。今までの美学者、哲学者などの説や論は暫く忘れてしまつて、直ちに人生に向つて思ひを凝らして見ると、其所に不思議な一種の感じがあると思ふ。例へば、今白刃を振りあげてゐる下に座して、我が頭の落ちるのを待つてゐる瞬間の心持ですね、之れを唯「恐ろしい」と言つて仕舞へば、それツキりですが、『恐ろしい』と言ふ言葉だけでは、到底此の間の感じは現はしつくすことは出来ない。不
断は我れと人生との間に何か幕のやうなものが掛かつてゐる、然るに一旦大事変に触れ、危急存亡の期に臨めば、此の幕は破られて、我れと人生とはピッタリ面と面を衝き合はせるやうな一種の感じがする、是れは人生の妙味おもしろみといふものではないか、此の妙味おもしろみを言ひ取るのが、詩人小説家の本分ではないか。』（「作家苦心談」明30・5）

ここに言う「不思議な一種の感じ」が実感であることは断わるまでもない。注意すべきは、その実感の機構についての言及があることである。すなわち、「我れと人生とがピッタリ面と面を衝き合はせる」と述べるとき、実感が、人生というフィジカルな対象と、それに対する自己というメタフィジカルな主体とのほゞまに位するものだ、というとらえかたである。平生は、二者の間に「何か幕のやうなもの」があつて判然としない。その「霞だか雲だか見たやうなもの」は、此際一時に掃蕩せられて、ピッタリと面と面とが出合ふ（同）のが「実感」である。いわば、生命への肉迫であつて、ここに「実感」の基本的な構図を見てとることが出来るであらう。

「人生」と「我れ」とが「ピッタリあり」という「実感」の基本構造は、「現実界」と「精神界」との関係としてとらえることができる。「精神界と現実界とはいつまでも、相離して没交渉で、我は我たり汝は汝たりでさつさと推移して行く」（遺稿「雑談」明43年版全集第四巻にはじめて所収）

ところで、「精神界」と「現実界」との乗離をなげくこの種の文章が晩年の四十一年に多く見られ、三十年の「作家苦心談」においては、例えば「自分は斯ういふ方面に向つて、やつて行きたいと思つてゐるのです」といったふうの、願望体の表現がとられている事実は、なにを語るものなのか。三十年と四十一年との間で、彼は「茶花髪」を流産させ、「其面影」（明39・10・10）、12・31）「平凡」（明40・10・30）「失敗作」（「平凡物語」明41・2）を執筆せねばならなかつたという事情がある。当人の語るところに従えば、「私は筆を執つても一向氣乗りが為ぬ。どうもくだらなくて仕方がない。『平凡』なんて、あれは試験をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不十分だったから、試験もとう／＼達しなくつて了つた。」（「私は懷疑派だ」明41・2）ということである。「精神界と現実界」、自己と現実、想と実の世界の乗離、——二葉亭におけるこの二律背反の自己矛盾が終生彼を苦しめさいなんだことは、すでによく知られているところである。ただここでは、彼がその自己矛盾を「実感」のがわから救済しようと企図していたことを看過してはならないであらう。「実感」を論ずるにあつて、三十年の文章が願望体をとり、晩年の文章が、いわば「はたさざりし志」を苦渋にみち

のせているのである。

「私は二十世紀の文明は皆な無意義になるんじゃないかと思ふ。何と言っても今はまだレフレクションの影響を免れてゐない。十九世紀で暴威を逞しくした思索の奴隷になつてゐたんで、それを彌々脱却する機会に近づいてゐるらしく見える。新理想とか何とか言ひ出すな、まだレフレクションに捉はれてゐる証拠さ。併しさすがに以前の理想では満足出来ん所から、新理想主義になつて来たんだ。文学の方で最近の傾向はシムボリズムとか、ミステジズムとか言ふのだが、イズムの中に彷徨^{彷徨}いてる間^間や未だ駄目だね。象徴主義で言ふ霊肉一致も思想だけで、真実一致はして居らんぢやないか。で、私は露語の所謂ストリヤツフヌスト(身震ひする)と言つたやうな時代……つまりこびり着いて居る思想の血^血を払つて、新たな清い生活に入らうとする過渡の時代のやうに今を思ふ。人生の意義は解らんといふ結論までにや疾くに達してゐるくせにまだく思想に未練を残して、やはり其から蟬脱することが出来ずに居るのが今の有様だ。文学が精神的の人物の活動だといふが、その『精神』が何となく有難く見えるのは、その余弊を受けて居るんで、霊肉一致どころぢやない、よほど霊が勝つてゐる証拠だ、だからシムボリストでも、思想では霊肉一致だらうが、自分の存在では未だ其処までは行つて居らんよ。」(「私は懷疑派だ」明41・2)

かくして、「実感」は、生活を闘うものなまの願望であり経験であり苦しみであり哀歎であつて、その個性性を粗い図式で断ちきろうとする「理屈」「思索」「思想」「靈」に反抗するとともに、「論理」「思想之方則」(「私は懷疑派だ」といった、

抽象化されたいっさいの観念の世界とは対蹠の関係において成立するといふ特徴をもつ。

さて、第三は問題となるのは、二葉亭という主体の裡においてこのような「実感」を生起させる世界というのがいわけ^{いわけ}実践躬行^{実践躬行}の世界にほかならなかつたという、論理の単純な無媒介性そのものにある。

彼によれば、「その文学は私には何うも詰らない、価値が乏しい。で、筆を採つて紙に臨んでゐる時には、何だか身体に隙があつて不可^{不可}、遊びがあつて不可^{不可}。どうも何う決闘^{決闘}になつて、死身になつて、一生懸命に夢中になる事が出来ない。これに就いては久しい間苦しんだのですが……。で、国際問題——と言つても是れが又所謂外交や国際問題とは違つて、是亦私一個の解釈による国際問題ですが、これならば私も決闘眼になつて、死身になつて、一生懸命に没頭して了へさうである。其処ならば何うも満足して死なれさうである。」(「送別会席上の答辞」明41・7)といふことになる。

ところで、今日でこそわれわれは「理論」のアントニムとして「実感」をおくことにそれほどの抵抗を覚えな³いのだが、じつのところはどうなのであろうか。日本の自然主義者たちが「実感挑発」などという用語で「実感」の強調をしたのは、明らかに今日の意味あいにおいてであつた。周知のように、美を拒否したまなましい現実、ないしはむしろ、まなましい現実こそが美であるといふふうの用法が彼らの使用法である。しかし、ここで明治四十一年にかわされた泡鳴・抱月の応酬に触れておきたい。この前後実業界(蟹の缶詰業経営)にも関係している泡鳴は、芸術即

実行の説をなして、その著「新自然主義」において「知情意の一致燃焼たる利那的心熱、即ち無余裕、無解決、真剣勝負の美感が新しい美であって、その具体化としての芸術はあくまで美感のそれで反感ではない」と説いた。それに対して、芸術即観照の説を唱える抱月は、芸術と実生活との間に一線を画して、芸術は「美感」ではなくして「反感」であると反駁し、咆鳴をして「美感と反感との説を誤解」(「芸術と実生活の界に横はる一線」明41・9)混同したものとたしなめているのである。

ここで注目したいのは、「美感」の対立概念が「反感」であることであり、それはまた遡って、鷗外における「実情」[Realgefühl]と「佞情」[Scheinge-fühl]とに対応するのではなからうことである。鷗外はハルトマンを粗述することで「佞情」について、「美なる感情を名づけて佞情といふ」(「審美綱領」明32・6)としている。かくして、二葉亭における「美感」の用法があるのである。

さて、「二葉亭の「美感」にもどるとして、彼の「美感」が《実践躬行》を志向することによって一応の成就がなりたつには、次のような背景がある。

「積極的といへば主義だが、一方から言へばこれは僕の避難所なのさ。人生問題、極致問題、これには長い間散々苦しめられてゐた。懐想的、反省的に、随分考へてゐたものだ。が、幾ら苦しんだってなかなか決着するものぢやない。(中略)遂に国際問題?といふことになった。これがいい。これなら没頭出来さうだ。」

(「酒余茶間」中の「当面主義」明41・5)
「当面主義」とはいえ、尾州藩邸で生をうけ、「恠く維新の動

乱の空気にも稍美感的に触れてるので、それで一味ハイカラならざる或る(言はば豪傑趣味ともいふべき)もの、さては国家問題、政治問題の趣味などが僕等には浸み込んでゐる」(同)「維新の志士肌」(「予が半生の懺悔」)の彼が、名古屋藩学校、松江相長舎、済美齋などで幼少を過ごすのである。《実践躬行》という志向性を主体の裡につちかかっていったであろうことは、幼少の訓育がいかに多く個性の展開に参与するものであるかを説くまでもなく明らかである。

(1) 高畑昭久氏「思想における抽象の機能」(「思想」昭33・8)

(2) 本文の「血」は、この談話の筆記者前田晃の聞き違ひで、「塵」とあるべきところ。二葉亭には、「露国の批評家は甘いことを謂つてゐる。自然主義は塵に塗れてゐる。其塵を段々と振ひ落して来た、アンドレーフに至つて塵が全く落ち切つたと謂つてゐる。(中略)それから見ると日本の近来の傾向は塵に塗れようと努めてゐるのだ。」(「露西亞文壇の傾向」明41・4)という同じ用例がある。

(3) 例えば丸山真男氏の「美感信仰」と「理論信仰」など。
(4) 吉田精一氏『自然主義の研究』下巻。

三

ここでわれわれは、いわゆる「美感」尊重の論理を、彼がどのような意味と要請とをもって獲得するにいたつたかということについてすこし検討しておく必要がある。その論理獲得の過程の動

きのなかから、「実感」論の志向する方向ならびに論理の定着する地平をうかがい知ることが出来るだろうからである。以下では、「小説総論」(明18)ならびに「浮雲」(明20と21)から、「作家苦心談」(明30)を経て「平凡」(明40)にいたる、ほぼ十年単位の各時点に手がかりを求めて、「はたさざりし志」としての「実感」論を獲得する彼の精神史の軌跡をたどってみよう。

さて、「浮雲」の方法を基本的に支えている彼の論理とは、言うまでもなく、ペリンスキーの方法論を継ぐ「小説総論」の認識である。そして、その認識の根本は、「実相を仮りて虚相を写し出す」ということであつた。つまり、この時点における二葉亭の認識原理はおおまかに言つて、次の三つの概念によつて構築されている。具体的に個別性のある現実としての「形(フォーム)」、抽象的で一般的な観念としての「意(アイデア)」、そして二者のなかだちとなる具体的形象としての「タイプ」、の三つである。「小説総論」は、まず、「凡そ形(フォーム)あれば茲に意(アイデア)あり」と規定する。「形」は「偶然」であり、「種々」であり、「変更常ならず」であるが、「意」は「自然」であり、「一致」であり、「万古易らず」である。「形」は、具体的に個別性のある現実そのものであり、「変更常な」い流動性のある現象にすぎないから、人は「性質の需要」としてその特殊な現実のなかに、「万古易らぬ」普遍的な「意」を「穿鑿」することになる。この「意」こそが人の真に認識すべき対象として存在するのである。その「意」を知識をもつて理會するのが学問であり、感情をもつて感得するのが芸術であつて、両者の差は、その認識の形式をたがえているにすぎないのである。すなわち、芸術とは

「無形の意を、只一の感動(インスピレーション)に由つて感得するものであり、「感情を以て意を穿鑿するもの」なのである。

そして、この原理的な認識にもとづいて、そのうえで彼の模写論は構築されてくる。いわく、「抑々小説は浮世に形はれし種々雑多の現象(形)の中にて其自然の情態(意)を直接に感得するものなれば、其感得を人に伝へんにも直接ならでは叶はず。直接ならんには、模写ならでは叶はず」と。

このような主張源はヘーゲリアンであつたペリンスキー美学に求めることができるが、その撰取のしかた、生かしかたにおいていくらかの混濁ないし生硬さがあつたことについてはすでに多くの論及があり、例えばペリンスキーの未定稿訳「美術の本義」(「芸術のアイデア」明19以前か)の「美術は真理の直接の観察若しくは形象中の意匠なり」をあげるにとどめておく。この「真理」と先述の「意(アイデア)」との相関に関しては、二葉亭の裡において必ずしも明確な安定性があつたといふことはできないのだが、例えば「リアリティとは現象に形はれたる真理をいふ也」(「落葉のはきよぜ二籠め」中の「リアリティ本義」という用法なども考へて、「意」をも含む大概念としての「真理」ととらえるか、ないしは畑有三氏が詳細に論証されたように、二葉亭の内側から発想された「きわめて主體的な」「絶対的一定不變」の観念として「意」と「真理」とを同次元に考へてよいだらうと思ふ。

かくして、なかば強引にもともかく、二葉亭は、「模写といへることは実相(形)を仮りて虚相(意)を写し出すといふことなり」(注は私に付す)といふところへ到達する。

以上を要約して言えば、すべての現実はその「意(アイデア)」

の顯現であるにもかゝらず、身辺の現実には「特有の形状」をもつゆえに、必ずしも「意」の姿をあらわしてはいない。そこで、作家は現実を通してその背後にいきいきと存在するこの「意」をば、直感的に「感得」すなわち「感情」によって認識し、逆に現実をかりてその領略した「意」を作品として形象化する——これが、彼の認識法の基本構図である。

(作家) ↑ 「形」(フォーム) ↑ 「意」(アイデア) ↑ 「真理」(真理)
「小説総論」は、この構図をおもに上昇する論調で進められてゐるが、事情はいわば上下の相互還流にあつて、「意」・虚相と「形」・実相の媒介項として、次にあげる「タイプ」の概念がある。この構図を上昇するのが「感得する」認識の過程であり、下降するのが「伝へる」ための、個性を捨象して「タイプ」を創造・定着させる「模写」のダイナミズムである。

「自分の頭に、当時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具体化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか。(中略) 稍々自分の有つてゐる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土台にしてタイプに仕上げる。勿論、その人の個性はあるが、それを捨て、了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具体的なものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ訳だ。」(「予が半生の懺悔」明41・6)

「小説総論」ないし「浮雲」執筆という、彼の文学認識の二度と来ないこの高揚期を、彼の精神史の《第一次理論化》の期と呼ぶことはできないだらうか。少なくとも、「浮雲」の筆を折る前までは「一枝の筆を執りて国民の氣質風俗志向を写し国家の大勢

を描きまたは人間の生況を形容して学者も道徳家も眼のとどかぬ所に於て真理を探り出し以て自ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともならば豈可ならずや されば小説は瑣事にあらず 之をいやしといふは非なり」(明22・6・24の日記) 「文学熱のみ独り熾ん」(「予が半生の懺悔」) というほどの高揚ぶりが、彼の認識を支えていたもののように見えるのである。

次いでわれわれは、明治三十年の「作家苦心談」にいたつて彼の「実感」論に接することになる。この文学への回帰のうらには、明治二十二年に「浮雲」の筆を折つて以来の、八年間の沈黙が介在している。図式的に言えば、《第一次理論化》によって文学への志向をゆるぎないものとしたかに見えた二葉亭が、「浮雲」における敗退によつて想世界への陶醉を疑い、文学に対する志向性をどれほどにか弱めるか、ないしは否定へのモメントを抑制しかねるかのうちに、少なくとも自己の文学認識にある限定を加えるという段階である。逆に言えば、「実感」について「自分は斯ういふ方面に向つて、やつて行きたいと思つてゐる」という願望を表明することによつて、想世界のすぐ裏側のところですぐさま実践躬行への世界を暗示するといふ、四十年代の「実感」論による《第二次理論化》のきざしを露呈することになるのである。しかし、想世界に対して全き絶縁を宣しているのではない。立場は、あくまで文学者の側にある。

「私は何か書いて見るつもりでゐます、が世の現象に対する立脚地がきまりませんから、色々迷つてゐるのです。私の考へでは此の現象に対する心の据ゑ方に二通あるやうに思ふのです。

(中略) 作家で云つて見ればドストエフスキーとツルゲーネフと

は、此の二様の観世法を代表している気味があります。前者は作者と作中の人物の主なる人物とは殆ど同化してしまつて、人物以外に見えぬ。勿論詩人の批評であるから智に属する批判とは別物であるが、何となく離れて傍観している様子があります。約めて言つて見れば、直ちに世の実相の真中にとびこんで、其れから外圍の方に歩を進めてゆくのと、外圍の方から次第々々に内部の方に這入つてゆくのと二通りあると思はれるんですよ。私は今のところでは直ちに作中の人物と同化して仕舞ふ方が面白いと思つて居ります」（「作家苦心談」明30・5）

言うところのドストエフスキー的なもの、ツルゲーネフ的なものは、それに続くすぐあとで「ドストエフスキーの方は人物と人物との關係の上に或アイデアが著しく出てくるけれども、ツルゲーネフの方は爾ぢやなくつて、個々の人物の上のみ或アイデアが見らるる」とあるのと、逆転しているのでまぎらわしい。全体の文調からみて、おそらくは後者の名ざしかたが正しいのであって、「個々の人物にのみ或アイデアが見らるる」ツルゲーネフ的な「観世法」をよしとしているのである。だとするならば、ここには安住誠悦氏が指摘しておられるように、「『意形全備』を主張しつつ、なお『意』を主軸として構成せられていた『小説総論』の立場が、『形』を主軸とする文学観に転化して行く推移」を見なければならぬ。いわば、作者即主人公という私小説の公式への接近を見なければならぬということである。

また、芭蕉が深川で「心の味」を言ひとらうとして三日間煩悶したとして、「詰り感ずる側からではなく、感じさせる側から、いひ換へ

れば、即ち人生の味を言ひ取らうとしたと同じことになりませう。自分は斯ういふ方面に向つて、ヤツて行きたいと思つてゐるのです。（同前）と記す。「此の人生の味と言ふことは、宗教学も感じてはゐる。が尙取遺してゐる、哲学者も知らないことはないが矢張取遺して置く」、それを作家がこそあつかうべきだと述べるのだが、文学者の例を示しているながら、それにもかかわらず文学の論理を逸脱ないし否定するモメントがここにも芽ばえようとしている。

かくして、「作家苦心談」でそのはしりを露出させた「実感」の論理は、明治四十年の「平凡」において明らかに全貌をあらわにすることになる。

「文学は一体如何いふ物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を性命とするものゝやうに思はれる。文学上の作品に現はれる自然や人生は、仮令へば、作家が直接に人生に触れ自然に触れて実感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからには、本物ではない。写し得て真に逼つても、本物でない。本物の影で、空想の分るを含む。之に接して得る所の感じには何処にか遊びがある、即ち文学上の作品にはどうしても遊戯分子を含む。現実の人生や自然に接したやうな切実な感じの得られんのは当然だ。」（「平凡」六十一回、明40）

ここには、「空想を性命とする」文学の世界の明瞭な拒否がある。「小説総論」の論理においてわれわれが見てきたものはなにであつたらうか。文学の世界で形象することのできる「意」は、現実それ自体を陵駕する地点で現実に優位して保証されるはずであつた。そこで目的とされていた認識の対象とは、「実相を仮りて虚相を写

し出す」その「虚相」も「意」でなければならなかった。ここに表明された、「実感」尊重による想世界否定の認識において、われわれは、「小説総論」によって代表される『第一次理論化』の論理との明確な背理を認めることができるだろう。

そして、文学を否定する認識法がそのまま直接に志向する対象は、実践躬行の世界であった。「実業」(「予が半生の懺悔」明41・6)であり、「国際問題」(「送別会席上の答辞」明41・7)である。

「遂に国際問題?ということになった。これがいゝ。これならば店頭出来さうだ。眼の色を変へて騒いでゐられさうだ。」(「酒余茶間」明41・5) ここにおいて、「実感」の生起される世界が、現実に接しうる、『実践躬行』の世界であると考えられたのは疑いない。明治四十一年になって、「私は懷疑派だ」「文壇を警醒す」「予が半生の懺悔」「送別会席上の答辞」と次々に訴えている「実感」論の基調にあるのは、やはり『第一次理論化』の論理と鋭く対立するいわば彼の『第二次理論化』に相当する自己証明にほかならなかった。

想世界に対する『第一次理論化』から、実世界に飛翔することによって『第二次理論化』をなしとげようとした彼の自己論理化の軌跡に、しかし彼とはまったく逆に、現実の乖離を想世界に身を投ずることのでついえさっていった透谷との対蹠的な動きをみることにできるのである。(未完)

(1) 中山省三郎氏訳「芸術は真理の直接的な観照である。即ち形象を仮りての思惟である」(「二葉亭と露西亞文学」「文学」

昭12・9)

岩上順一氏訳「芸術とは真理の即時的な洞察のことであり、

あるいは形象化された思想のことである。」(「芸術のアイデア」) 古林尚氏訳「芸術は真実を直接に見ぬくものであるか、さもなければ、形象によって思惟するものである。」(「二葉亭四迷論」「文学」昭28・10)

松田道雄氏訳「芸術は真実の直接的な直感、あるいは形象の中における思惟である。」(「浮雲」について「文学」昭

34・2)

(2) 稲垣達郎氏「文学革命期と二葉亭四迷」(岩波講座「文学」

昭29・1)

井上秀一氏「小説総論」の位置」(「解釈と鑑賞」昭38・

5)

北岡誠司氏「小説総論」材源考」(「国語と国文学」昭40

・9)

(3) 畑有三氏「二葉亭四迷」(「日本文学」昭40・11)

(4) 安住誠悦氏「二葉亭における「実感」の問題」(「国語・国文研究」昭26・12)